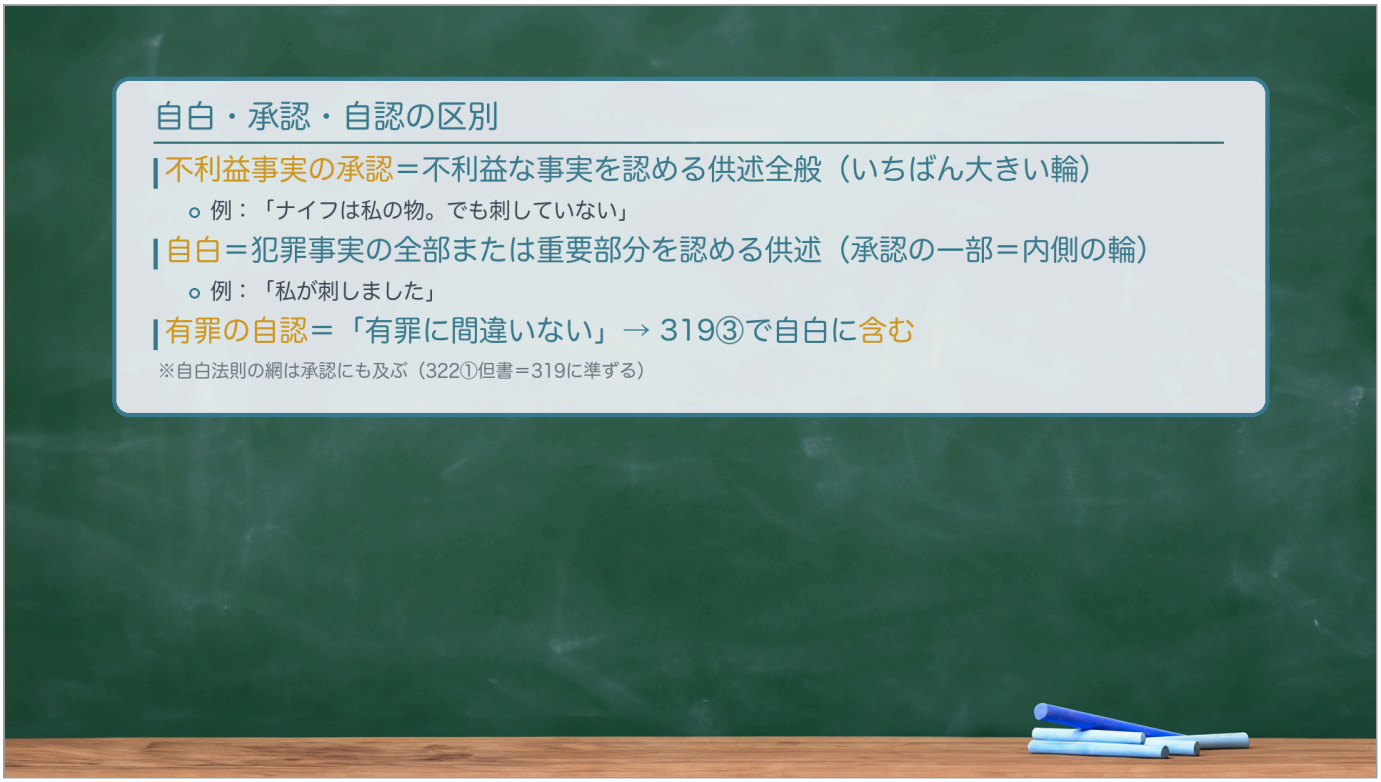
#30 自白法則（319条1項・任意性）

第4章 公判・証拠法 ⑦／動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

1 自白とは何か——承認・自認との区別

短答・論文共通



図：自白（承認の一部）・不利益事実の承認・有罪の自認の三層構造

自白とは、犯罪事実の全部または重要部分を認める供述です。「ナイフは私の物です。でも刺していません」という供述は、自白ではなく**不利益事実の承認**にあたります。承認という大きな輪の中に自白があり、さらにその中に**有罪の自認**があります。有罪の自認は、事実だけでなく「私は有罪だ」という法的評価まで認める供述です。

319条3項は「有罪であることを自認する場合を**含む**」と定め、有罪の自認を1項・2項の自白と同様に扱います。

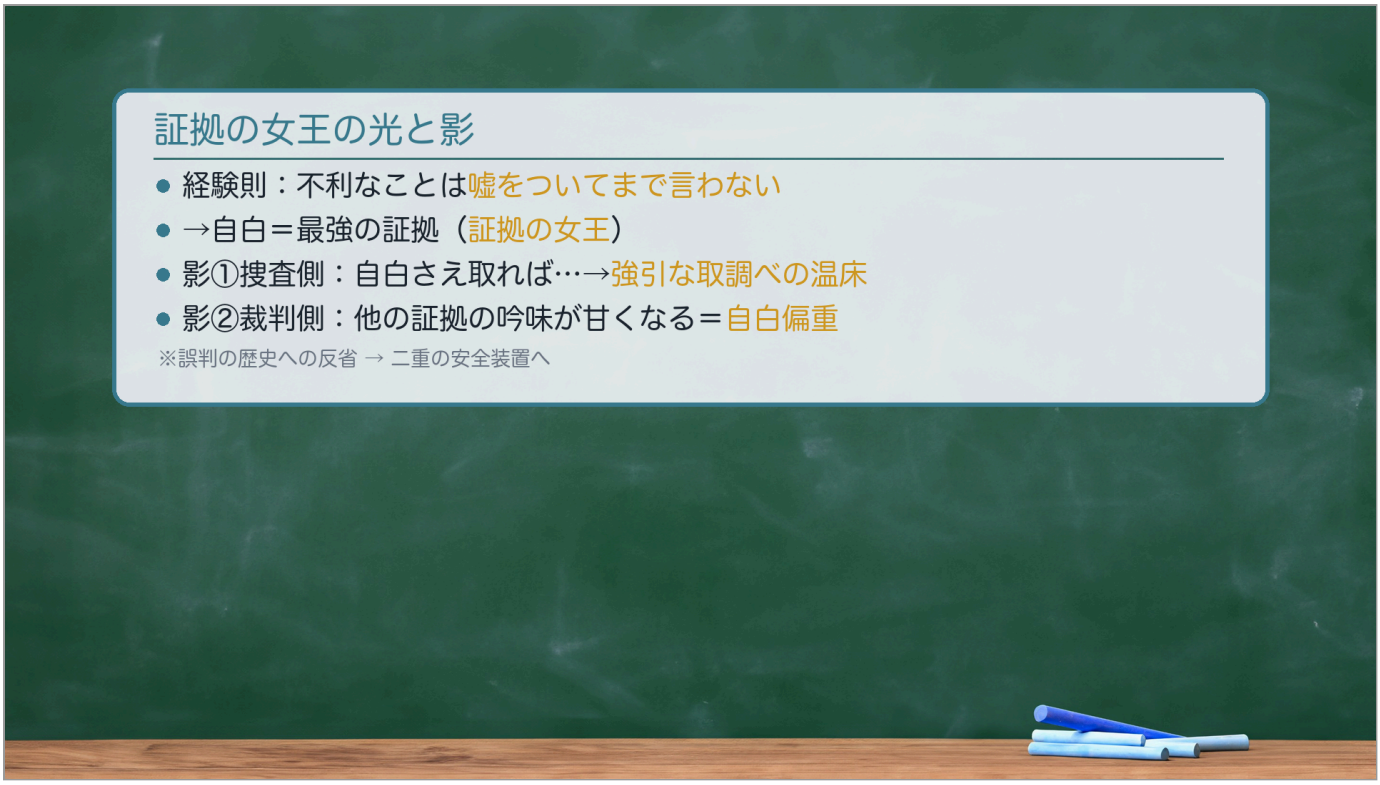
322条1項但書も確認しておきます。「承認が自白でない場合においても、**319条の規定に準じ**」、任意性に疑いがあれば排除される旨を定めています。自白法則の網は承認にまで広がります。伝聞法則と自白法則の交差点がここにあります。

条文 刑事訴訟法319条3項

前2項の自白には、起訴された犯罪について有罪であることを自認する場合を含む。

2 なぜ規制する？——証拠の女王の影

短答・論文共通

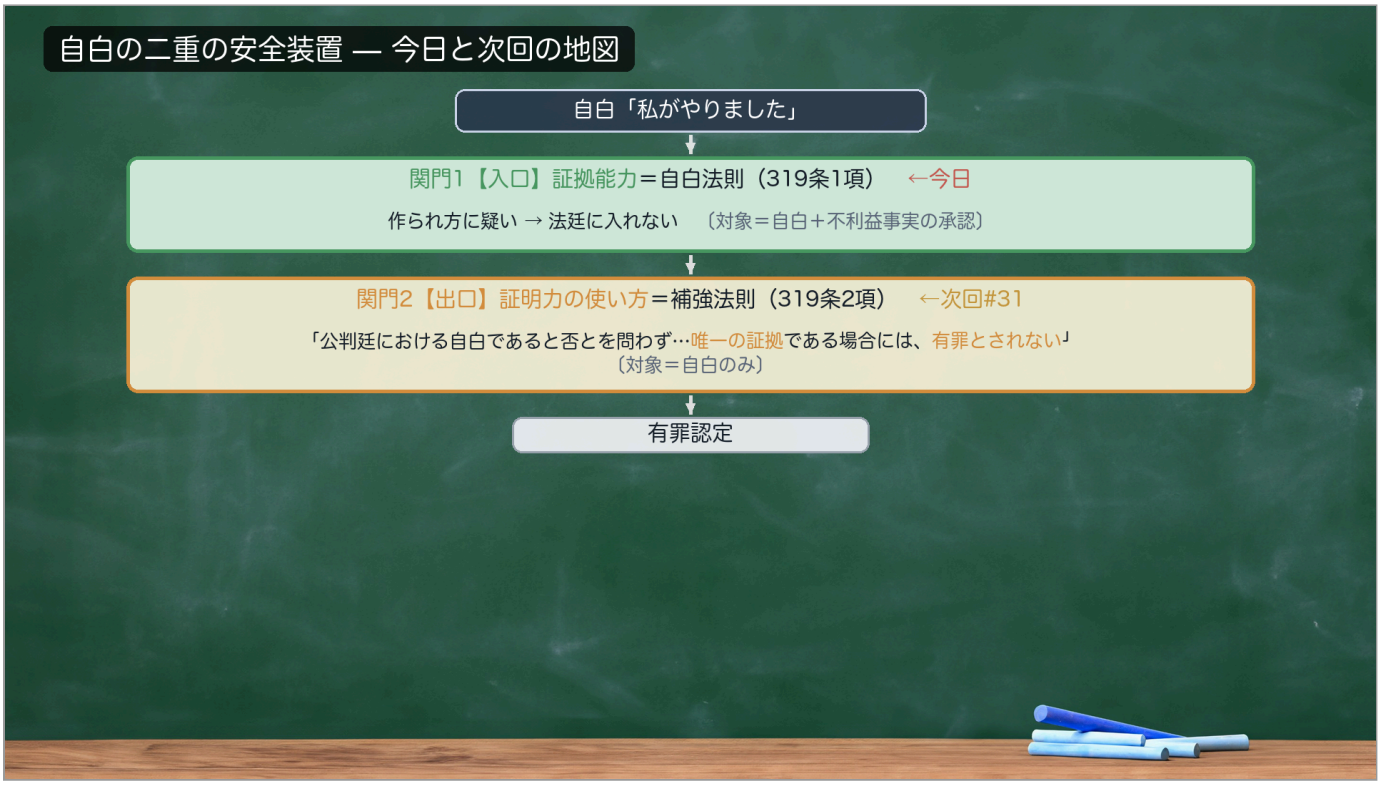


図：自白偏重がもたらす2つの弊害（捜査側の強引な取調べ・裁判側の吟味不足）

自白は昔から「**証拠の女王**」と呼ばれてきた最強の証拠です。しかしその強さが二つの弊害を生みました。

- 捜査側：自白さえ取れば勝ちという発想から、強引な取調べの温床になった。
- 裁判側：自白があると他の証拠の吟味が甘くなり（自白偏重）、誤判の原因になった。

法は**二重の安全装置**をかけました。

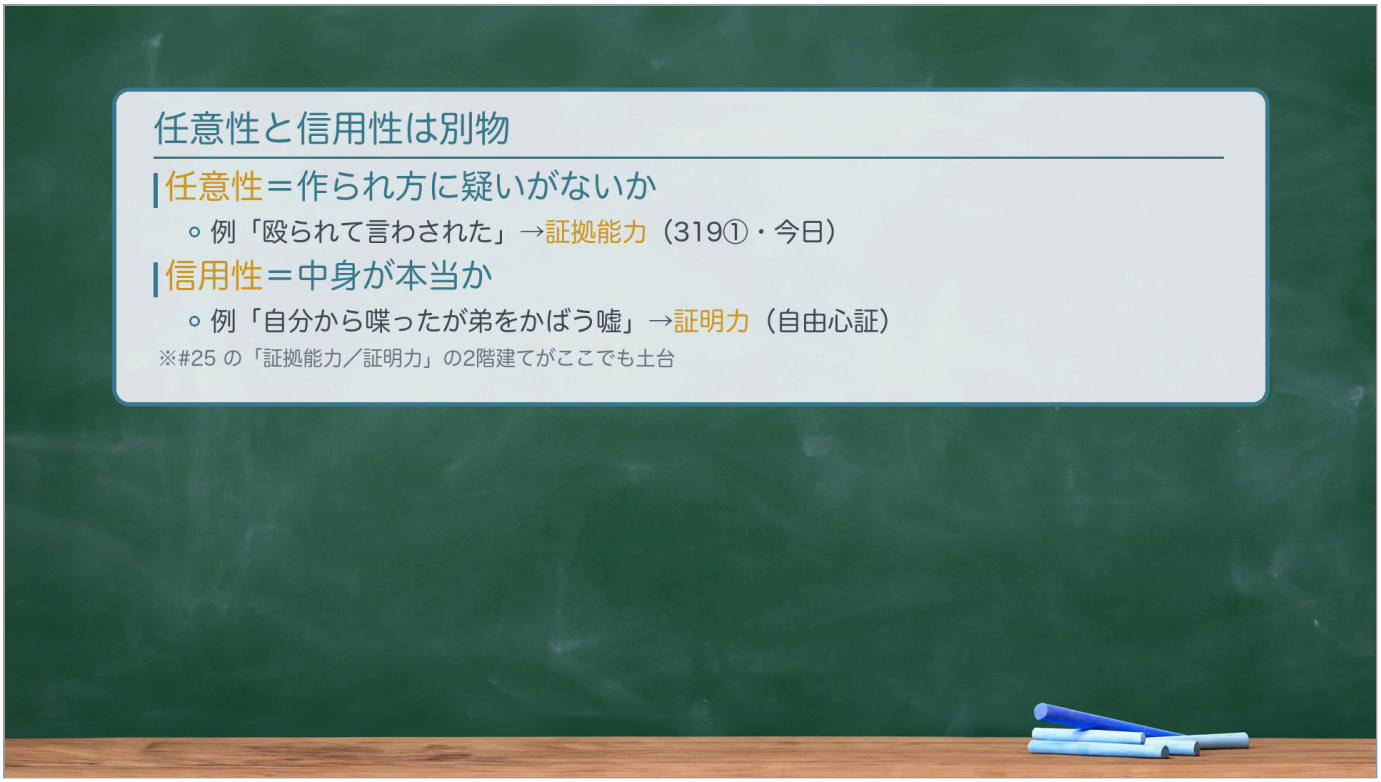


図：入口＝証拠能力（319条1項）、出口＝補強法則（319条2項）の2本柱

- **入口（証拠能力）**：319条1項——作られ方に疑いのある自白は法廷に入れない。
- **出口（証明力の使い方）**：319条2項——証拠能力が認められた自白でも、唯一の証拠である場合は有罪にできない（補強法則）。

覚えるポイント — 入口と出口の対象の違い - 入口（319条1項）：自白＋承認（322条1項但書で承認にも準用） - 出口・補強（319条2項）：自白のみが対象（承認は対象外）

任意性と**信用性**は別概念です。「殴られて言わされた」は証拠能力（任意性）の問題です。「自分から喋ったが弟をかばう嘘だった」は証明力（信用性）の問題で、自由心証の世界です。



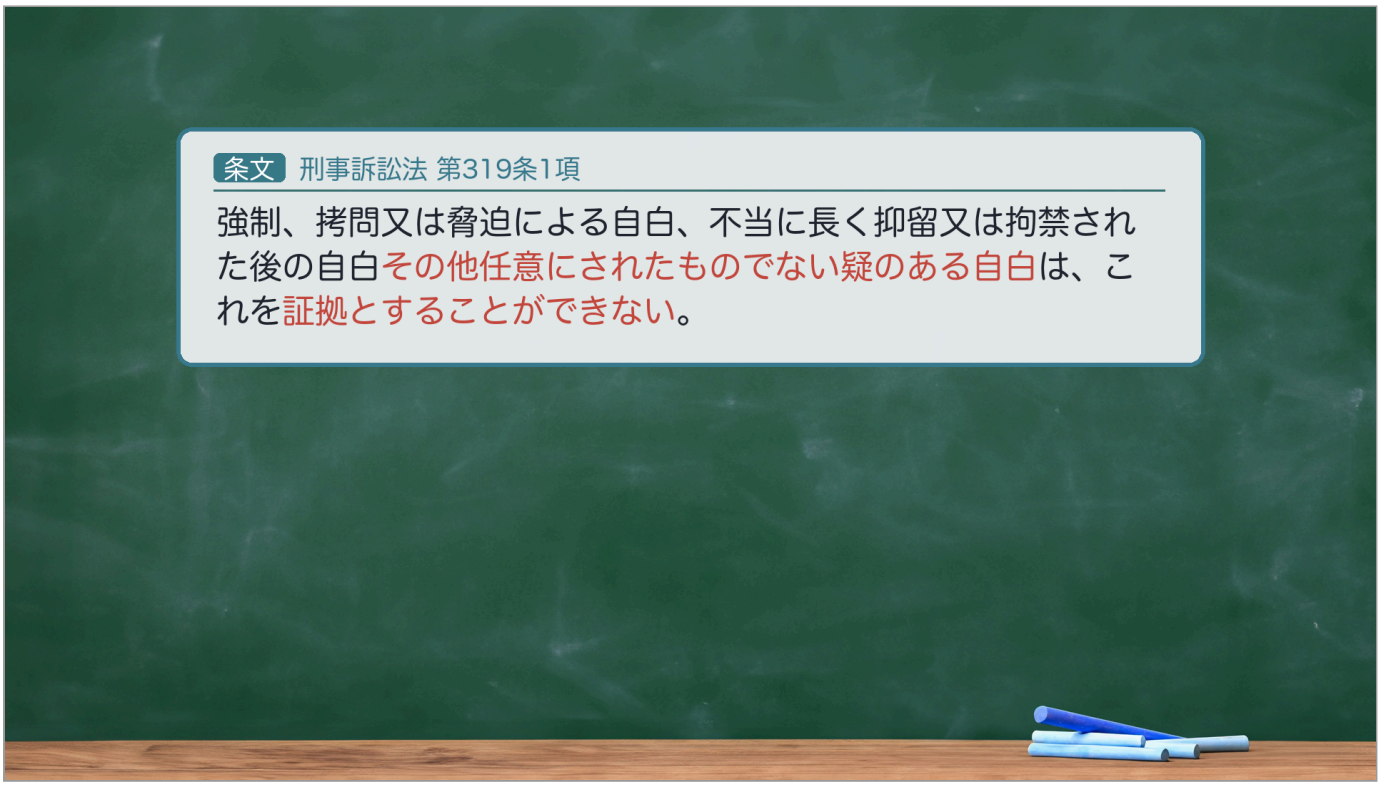
図：任意性＝証拠能力の話、信用性＝証明力（自由心証）の話

3 入口の条文——319条1項と憲法38条

短答・論文共通

319条1項と憲法38条を対比して読みます。

> **条文** 刑事訴訟法319条1項
>
> 強制、拷問又は脅迫による自白、不当に長く抑留又は拘禁された後の自白その他任意にされたものでない疑のある自白は、これを証拠とすることができない。



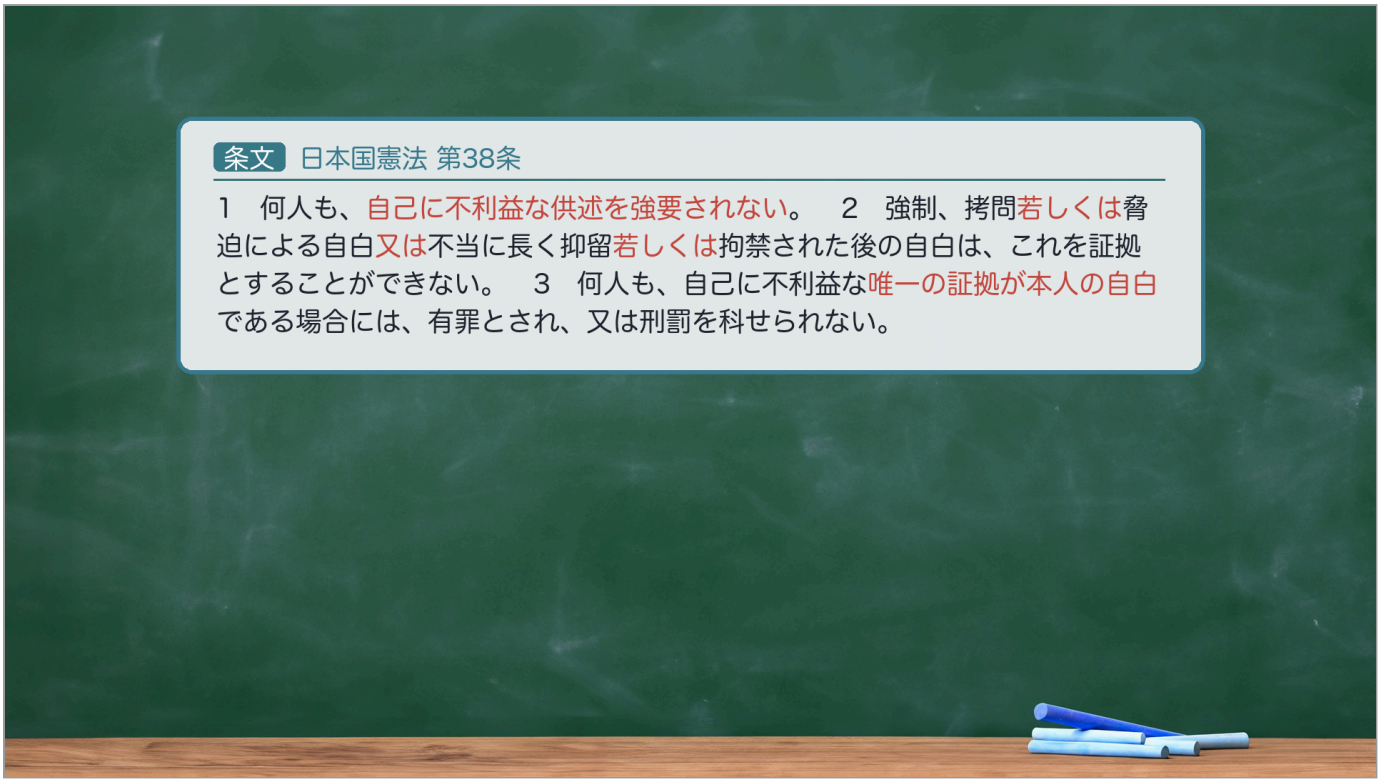
図：319条1項の全文（明文事由＋一般条項の構造）

明文の事由（強制・拷問・脅迫／不当に長い抑留・拘禁）に加え、**一般条項**（「その他任意にされたものでない疑のある自白」）が定められています。「**疑**のある」という言葉が重要です。不任意だと証明できなくても、疑いが残るだけで証拠にできません。そのため実務では検察側が任意性に疑いがないことを立証します。

憲法38条との対比です。

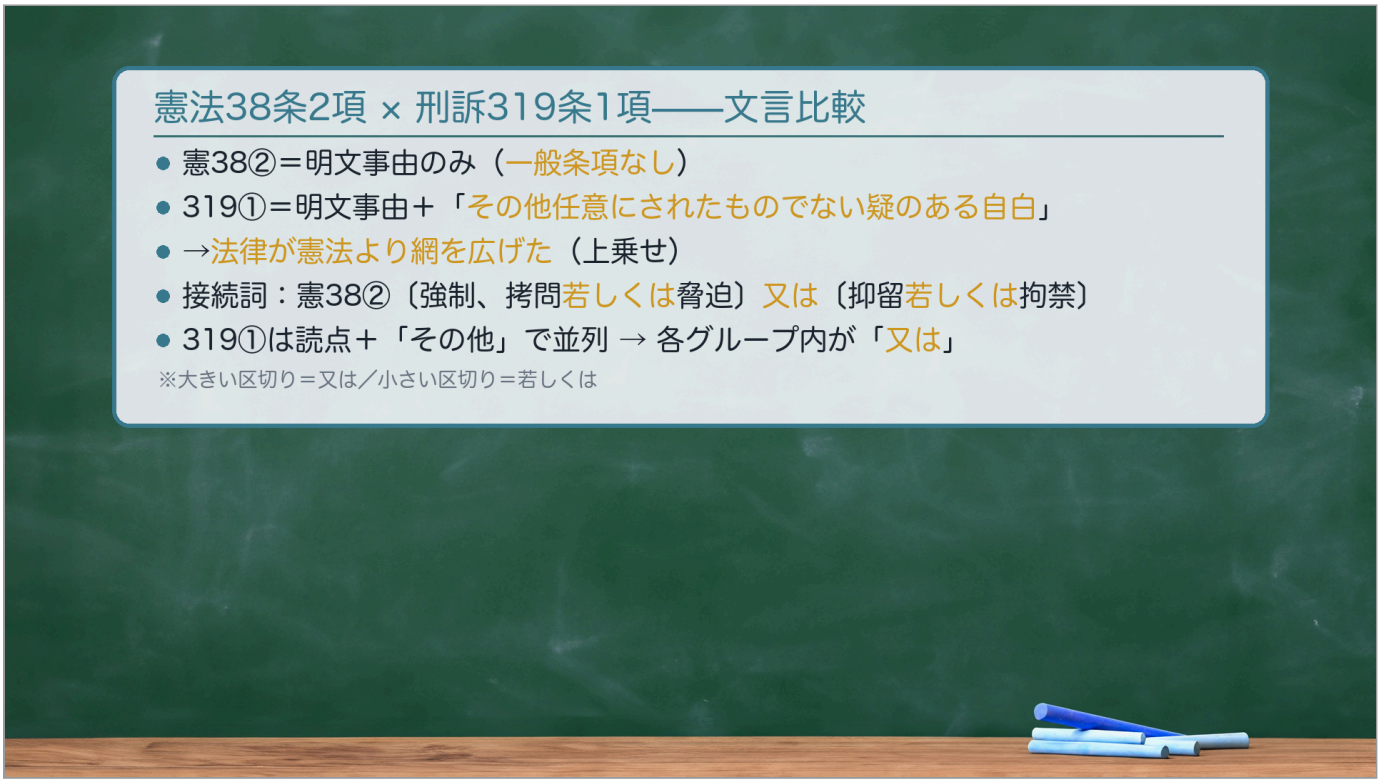
条文 憲法38条

何人も、自己に不利益な供述を強要されない。
強制、拷問若しくは脅迫による自白又は不当に長く抑留若しくは拘禁された後の自白は、これを証拠とすることができない。
何人も、自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。



図：憲法38条1項（黙秘権）・2項（自白排除）・3項（補強）の3層構造

覚えるポイント — 憲法38条2項 vs 319条1項 - 憲法38条2項：明文事由（強制・拷問・脅迫/不当な抑留拘禁）のみ - 刑事訴訟法319条1項：憲法38条2項の事由＋**一般条項を上乗せ**（法律が憲法より網を広げた） - 接続詞の違い：憲法38条2項は「若しくは」と「又は」で2グループを大小接続。319条1項は読点と「その他」で並べるため各グループ内が「又は」になる。

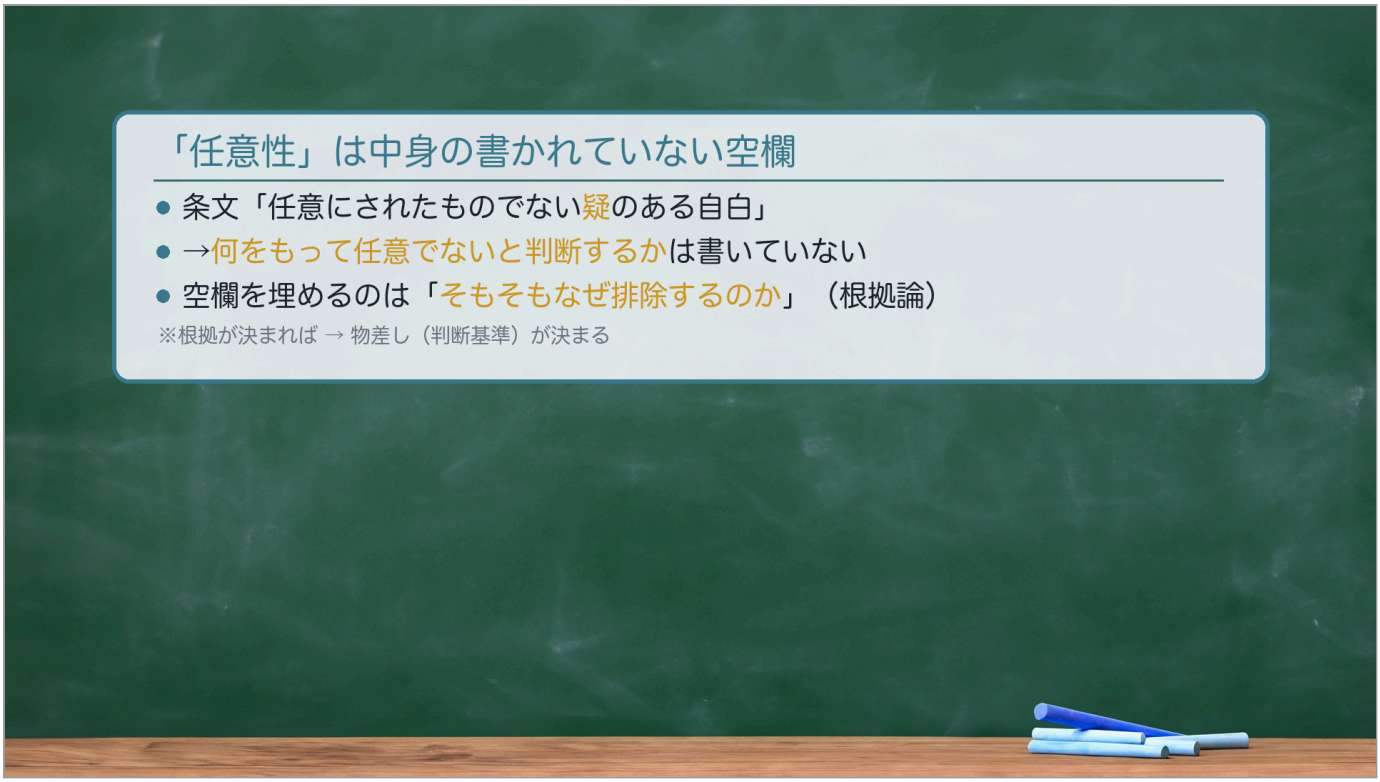


図：憲法38条2項と319条1項の文言構造比較（接続詞の違い）

4 なぜ排除する？——根拠3説という道具

論文の骨格

319条1項は「任意にされたものでない疑」と言うだけで、物差しの中身は書いていません。なぜ不任意自白を排除するのかという「なぜ」が、あてはめの物差しを決めます。根拠には3説あります。



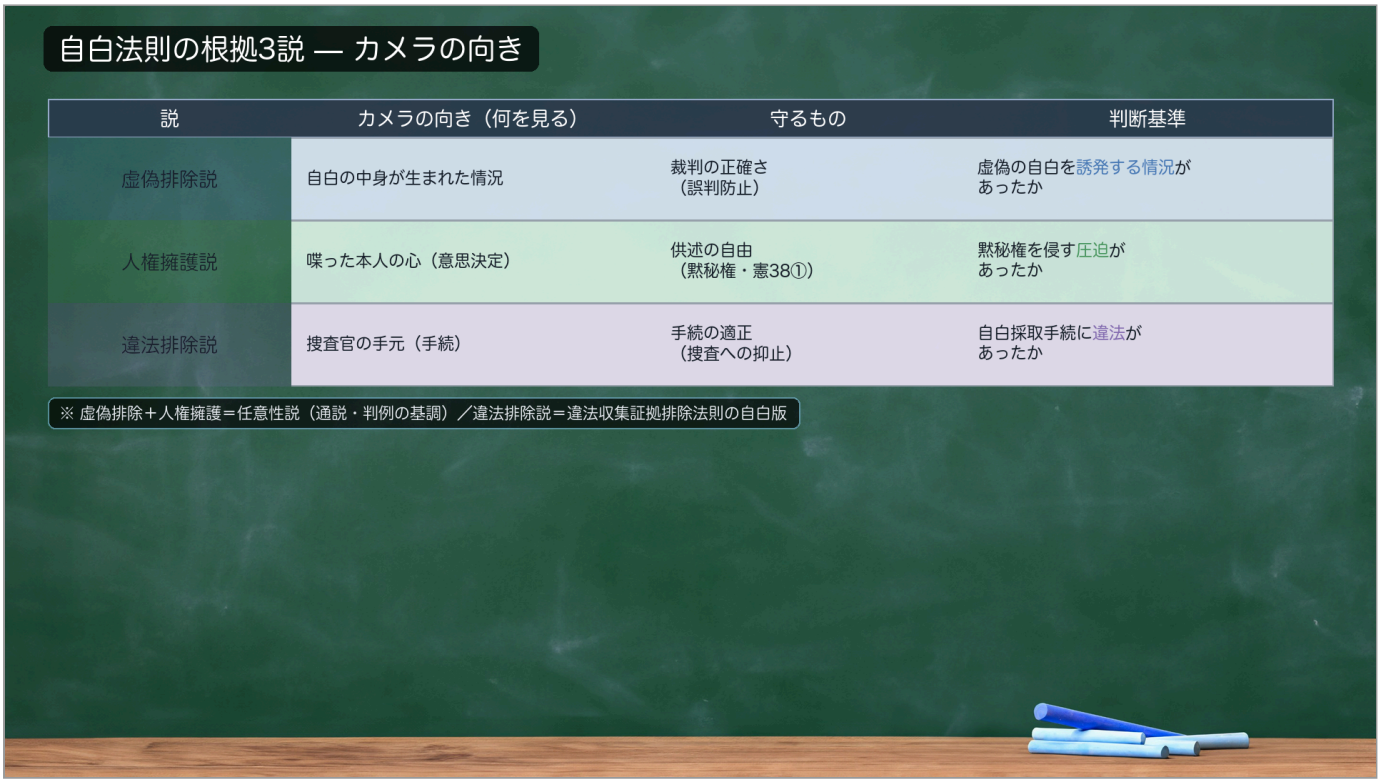
図：3説の「カメラの向き」——虚偽排除説・人権擁護説・違法排除説の比較

虚偽排除説：カメラは自白が生まれた情況に向く。守るのは裁判の正確さ（誤判防止）。基準は「虚偽の自白を誘発する情況か」。

人権擁護説：カメラは供述者の心に向く。守るのは供述の自由・黙秘権。基準は「黙秘権を侵す圧迫があったか」。

任意性説：虚偽排除説と人権擁護説を併せ持つ。通説・判例の基調。

違法排除説：カメラは捜査官の手元に向く。守るのは手続の適正（捜査への抑止）。基準は「自白を取る手続に違法があったか」。本人の心理状態は問わない。



説	カメラの向き（何を見る）	守るもの	判断基準
虚偽排除説	自白の中身が生まれた情況	裁判の正確さ（誤判防止）	虚偽の自白を誘発する情況があったか
人権擁護説	喋った本人の心（意思決定）	供述の自由（黙秘権・憲38①）	黙秘権を侵す圧迫があったか
違法排除説	捜査官の手元（手続）	手続の適正（捜査への抑止）	自白採取手続に違法があったか

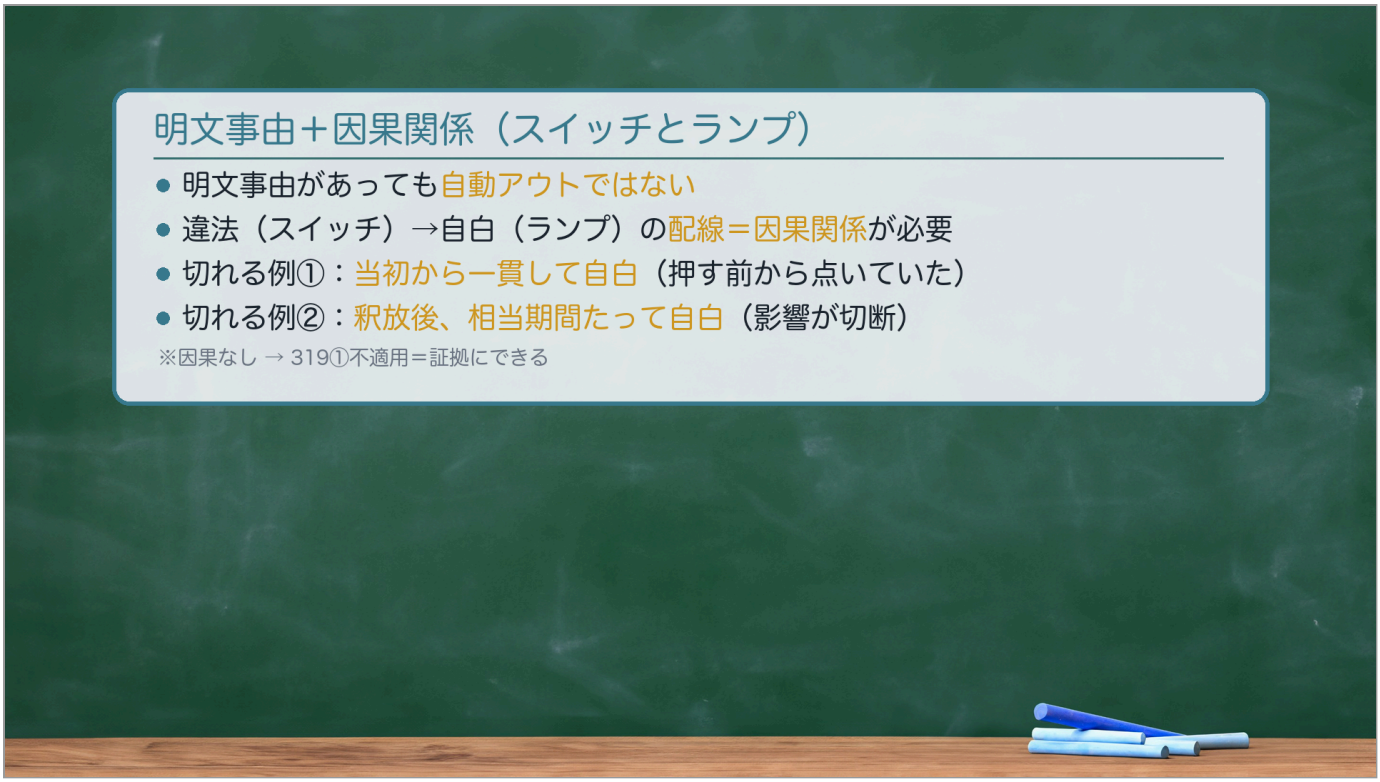
図：根拠3説の比較表（カメラの向き・守るもの・基準）

到達点：基本は任意性説で判断します。ただし心理の物差しでは切れない場面（後述の類型⑤）では違法収集証拠排除法則で補完します。3説は暗記して終わりの知識ではなく、後述の6類型であてはめを導く道具です。

5 明文事由と因果関係

短答・論文共通

明文事由（拷問・不当な長期拘禁など）があれば、自白は自動的にアウトにはなりません。違法な事由と自白の間に**因果関係**が必要です。



図：違法事由（スイッチ）と自白（ランプ）の配線——因果関係がなければ319条は作動しない

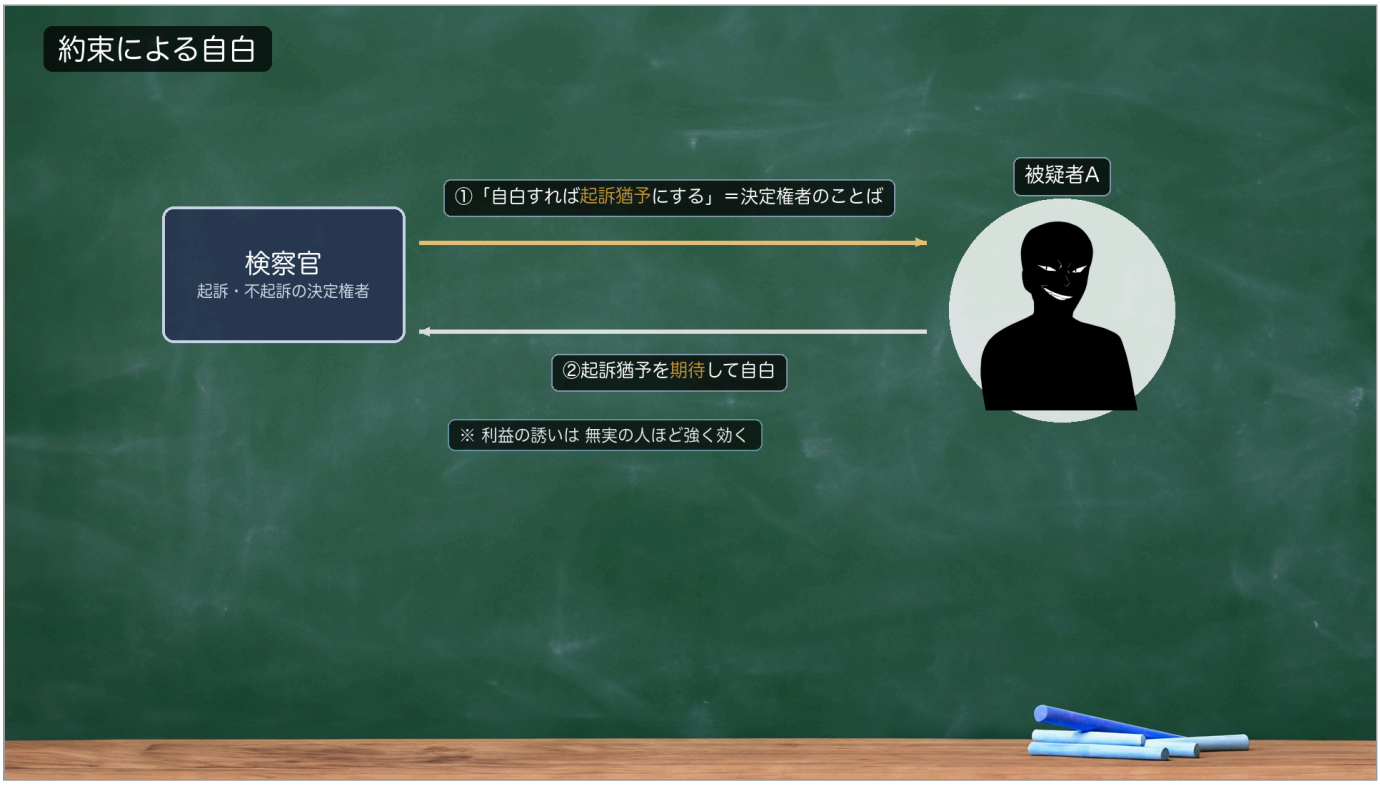
- 逮捕直後から一貫して自白していた者について、その後の拘禁が不当に長引いた場合——不当拘禁との因果関係がないため自白は使えます。
- 一度釈放されて相当期間自宅で過ごした後、自ら出頭して自白した場合——相当期間の経過で因果は切断されます。

明文事由イコール即アウトではない点は、短答でも論文でも重要な視点です。

6 類型①約束による自白

論文の骨格

争点6連発の1つ目は**約束による自白**です。



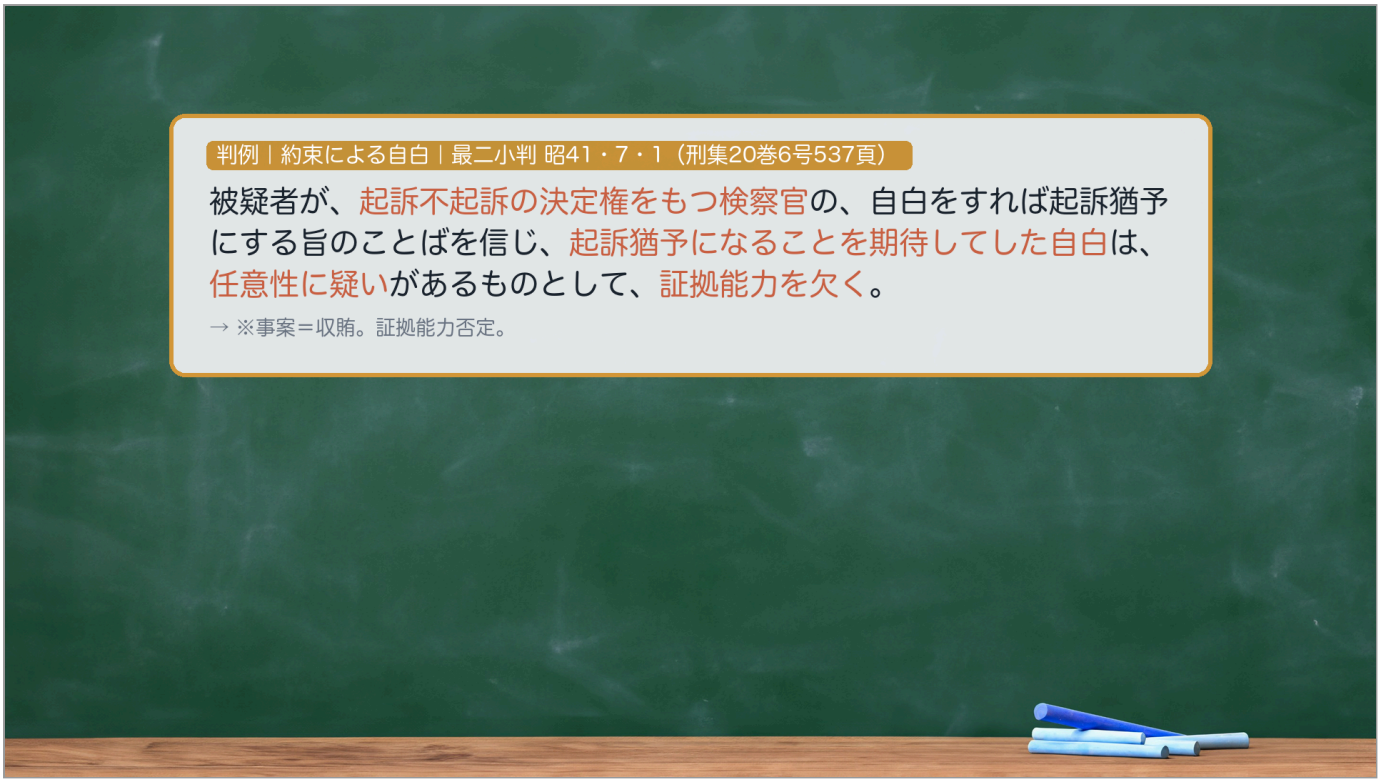
図：弁護人を通じて検察官の「起訴猶予にする」という言葉が被疑者に伝わる構図

事案：起訴するかどうかの決定権を持つ検察官の言葉（「自白すれば起訴猶予にする」）が弁護人を通じて被疑者に伝わり、被疑者は起訴猶予を期待して自白した。

利益の誘いは無実の人ほど強く効くという点が、この類型の危険性の核心です。

判例 最高裁第二小法廷判決・昭和41年7月1日〔約束自白〕

起訴不起訴の決定権を持つ検察官の起訴猶予にする旨のことばを信じ、起訴猶予になることを期待してした自白は、任意性に疑いがあり、証拠能力を欠く。



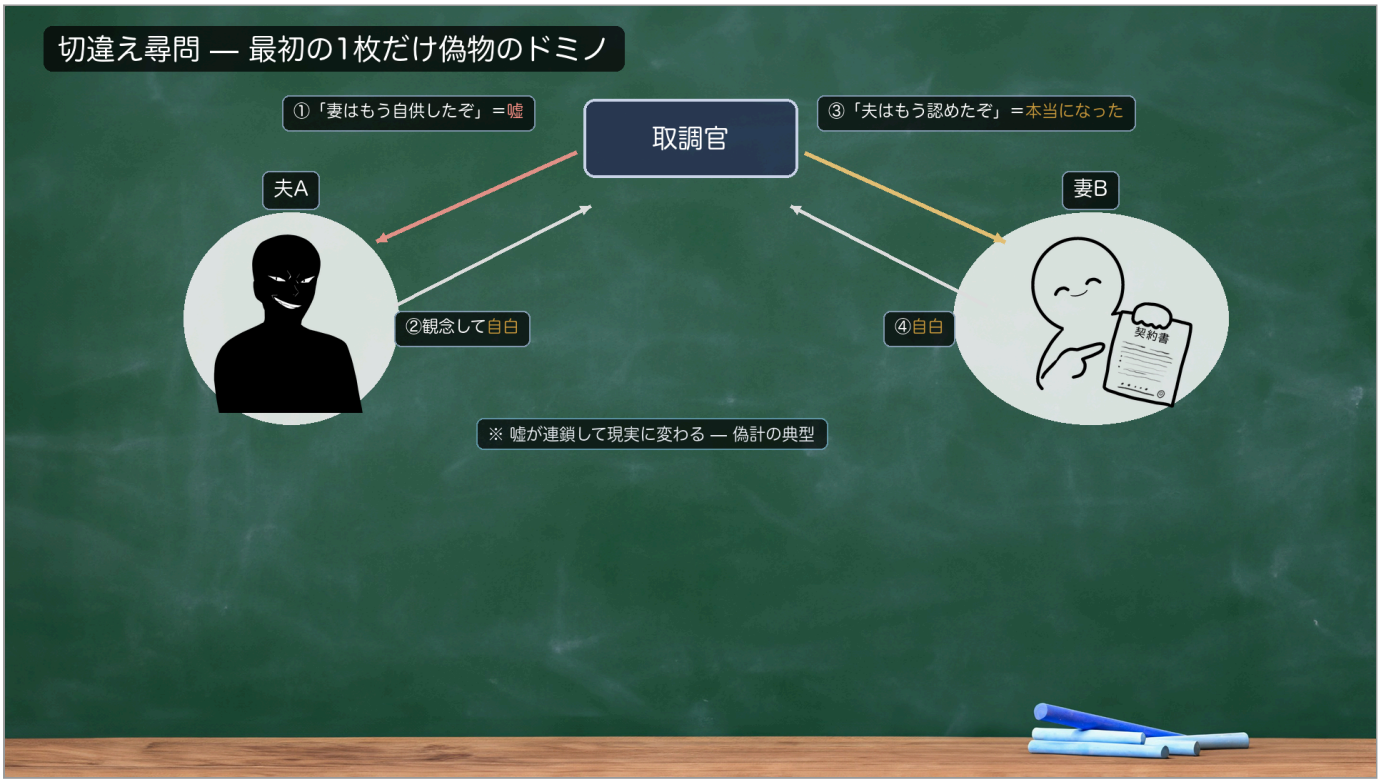
図：最二小判昭41・7・1――「決定権者」の言葉であることが誘引の強さの理由

3説での理由づけ： - 虚偽排除説：誘引が強力なので嘘の自白を誘発するおそれが大きい。 - 人権擁護説：利益と引き換えの供述は自由な意思決定と言えない。 - 違法排除説：取調べで約束すべきでない利益を示した手法自体が違法。

7 類型②偽計による自白――切違え尋問

論文の骨格

2つ目は**偽計**（騙し）です。

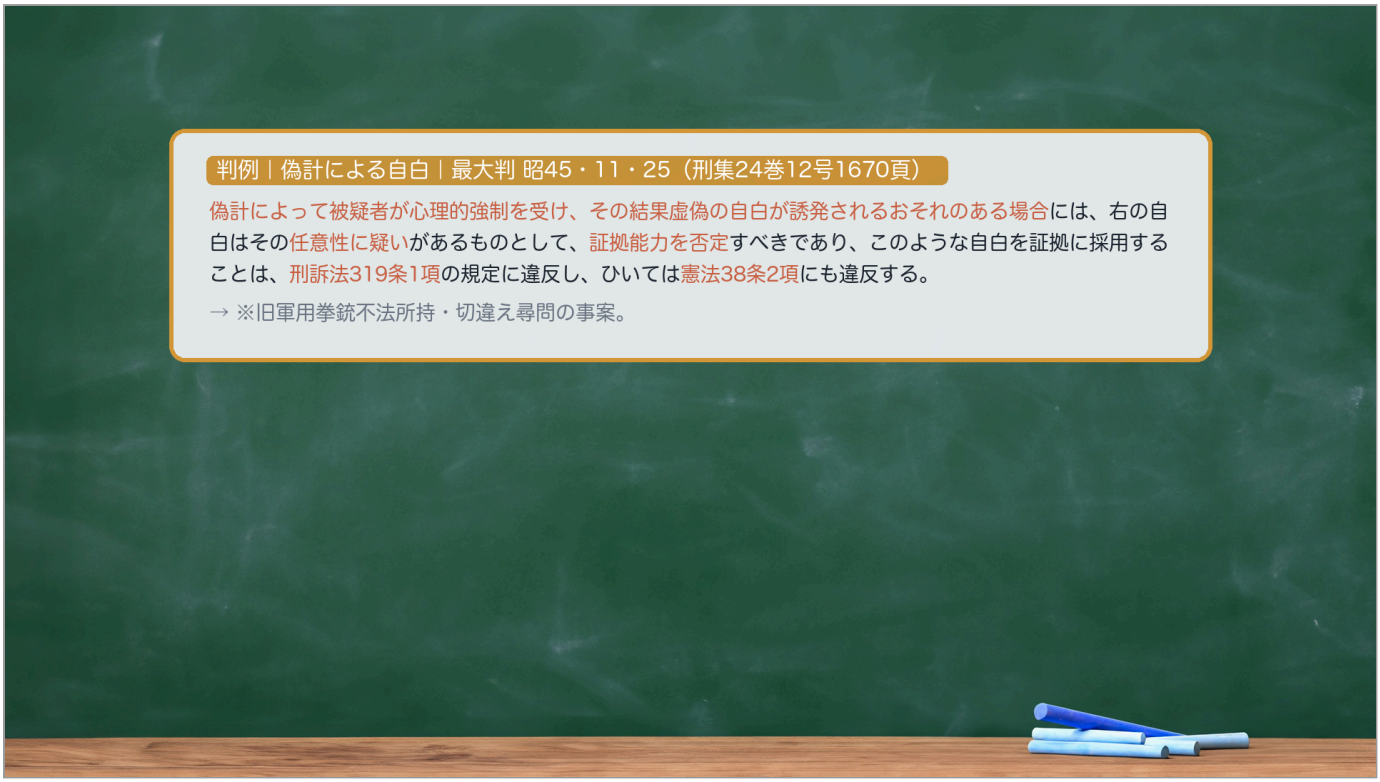


図：偽のドミノ（最初の嘘）で夫が倒れると、次のドミノは本物として倒れていく構造

事案：旧軍用拳銃の不法所持事件。妻との共謀を疑われていた夫に取調官が「奥さんはもう自供したぞ」と嘘を告げ、夫が観念して自白した。その後、今度は妻に「夫はもう認めたぞ」と告げる。これが**切違え尋問**です。

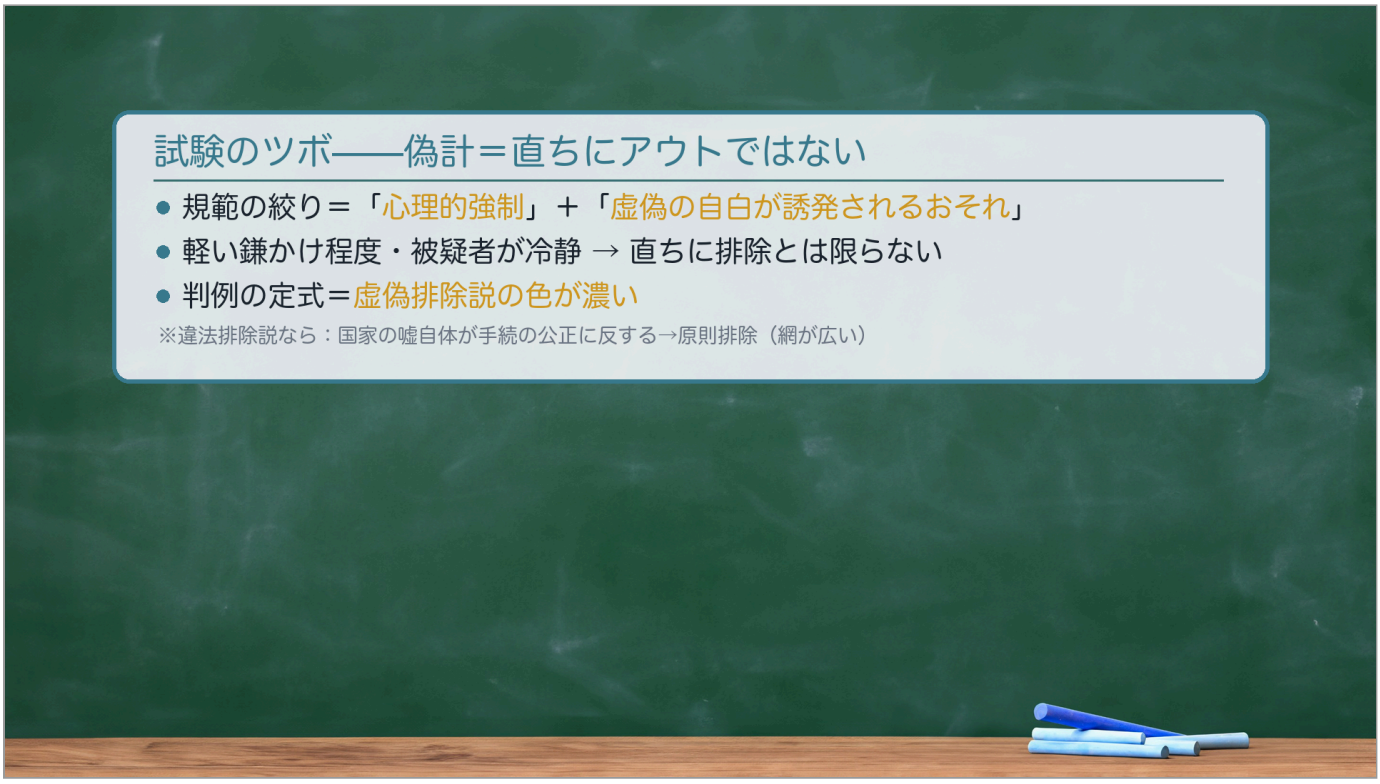
判例 最高裁大法廷判決・昭和45年11月25日〔偽計自白〕

偽計によって被疑者が心理的強制を受け、その結果虚偽の自白が誘発されるおそれのある場合には、任意性に疑いがあるものとして証拠能力を否定すべきである。採用すれば319条1項に違反し、ひいては憲法38条2項にも違反する。



図：最大判昭45・11・25——大法廷が示した「心理的強制＋虚偽誘発のおそれ」の定式

覚えるポイント — 偽計＝直ちにアウトではない



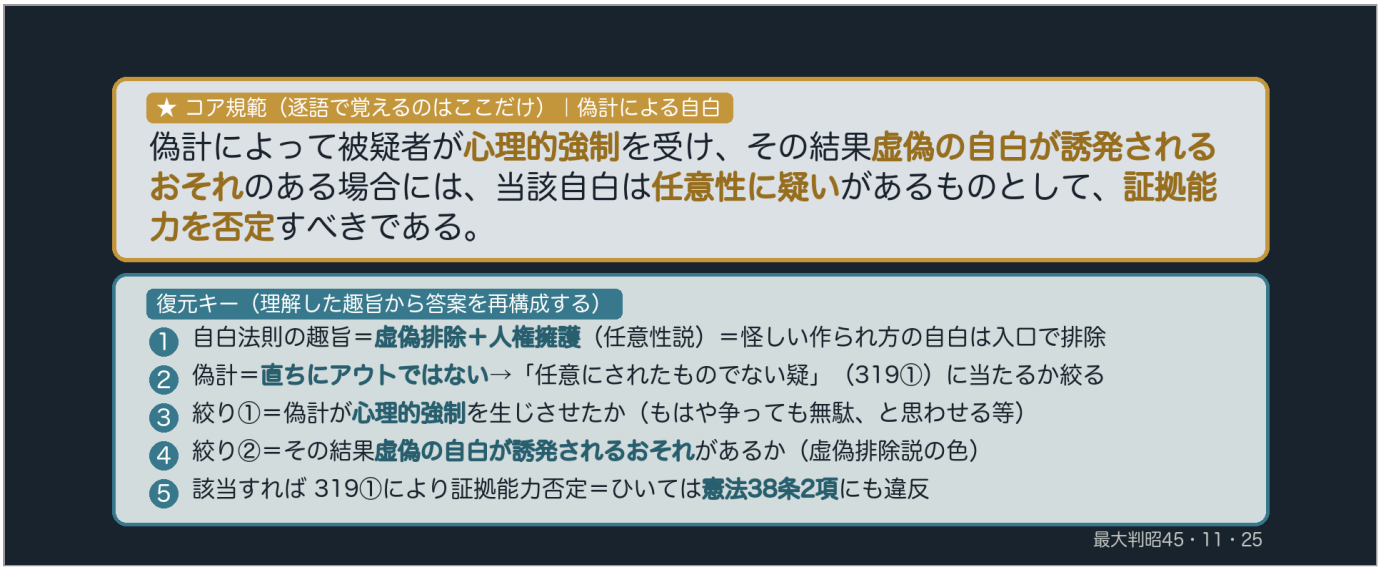
図：偽計があっても「心理的強制→虚偽誘発のおそれ」の要件を満たさなければ排除しない

判例の定式には絞りがあります。軽い揺さぶり程度で本人が冷静に判断できていたなら直ちに排除とはなりません。「虚偽を誘発する強さがあったか」が問われます。これは虚偽排除説の色が濃い定式です。違法排除説であれば、手続の公正に反するから原則排除となり、心理的強制の有無を問わず網が広くなります。

◆ 論文の型：偽計による自白

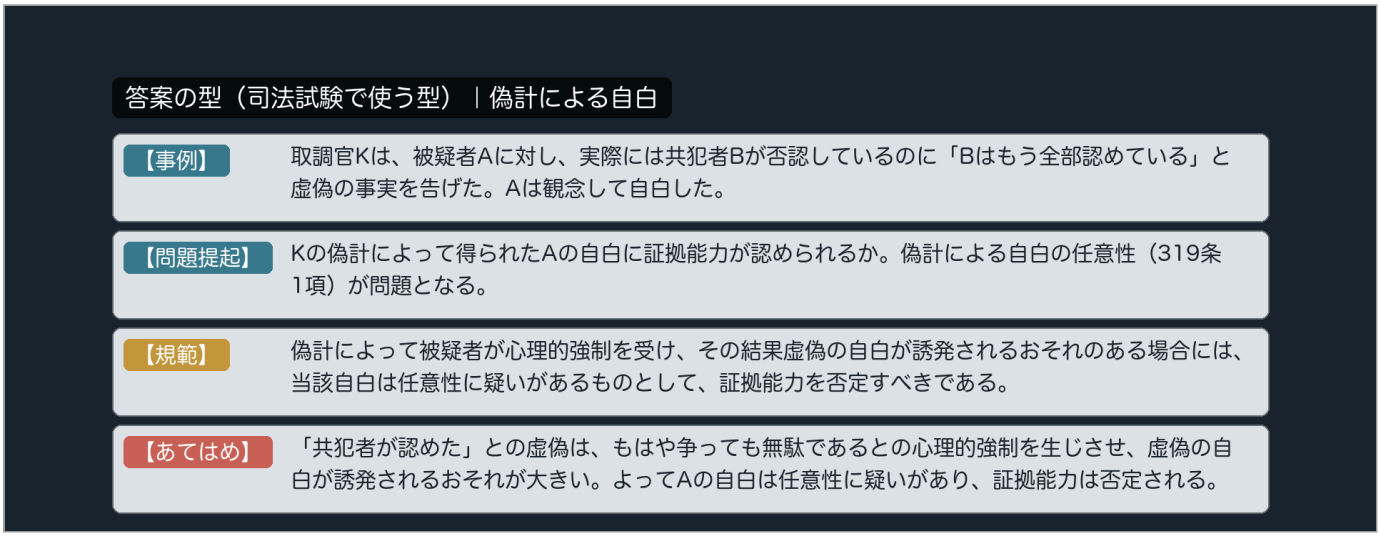
論文

偽計による自白で答案に書く規範と型は次のとおりです。



図：偽計自白の論文規範（最大判昭45・11・25の定式をそのまま答案化）

規範：偽計によって被疑者が心理的強制を受け、その結果虚偽の自白が誘発されるおそれのある場合には、任意性に疑いがあるものとして証拠能力を否定すべきである。



図：偽計自白の答案構成（事例→問題提起→規範→あてはめの流れ）

答案の流れ（実演例）

取調官KがAに「共犯者Bはもう全部認めている」と嘘を告げ、観念したAが自白した事案。

1. **問題提起**：偽計で得たAの自白に証拠能力はあるか。319条1項の任意性との関係で問題となる。
2. **規範**：上記の定式を立てる。
3. **あてはめ**：共犯者が認めたという虚偽は「もう争っても無駄だ」という心理的強制を生む。よって任意性に疑いがあり、証拠能力は否定される。

8 類型③手錠をかけたままの自白

論文の骨格

3つ目は**手錠のままの取調べ**です。

事案：公職選挙法違反事件。手錠をかけたまま取調べが行われ、自白調書が作成された。

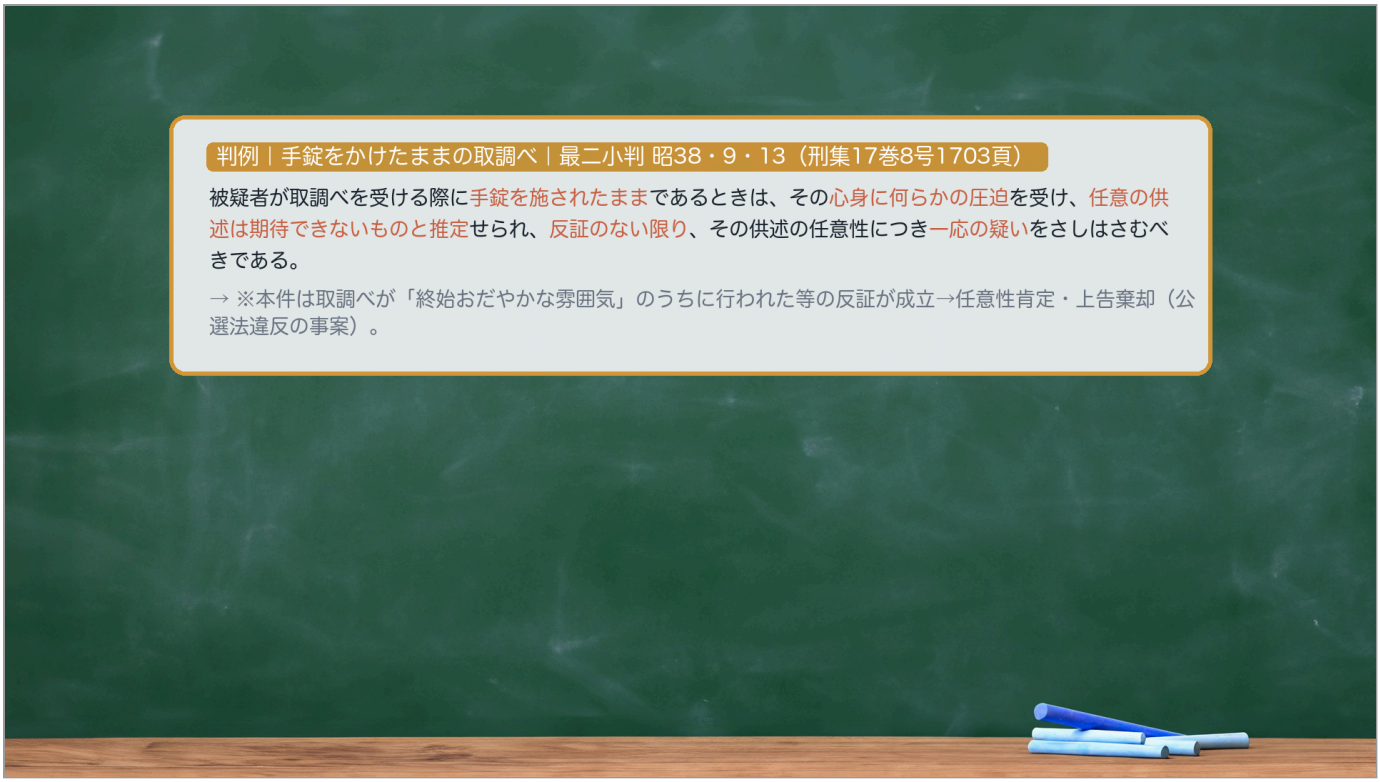
取調室には公判廷の身体拘束を禁じる287条1項が直接及ばないため、判例は次の構成を採りました。

> **判例** 最高裁第二小法廷判決・昭和38年9月13日〔手錠自白〕
>
> 手錠を施されたままであるときは、その心身に何らかの圧迫を受け、任意の供述は期待できないものと推定され、反証のない限り、任意性に疑いがある。

判例｜手錠をかけたままの取調べ｜最二小判 昭38・9・13（刑集17巻8号1703頁）

被疑者が取調べを受ける際に手錠を施されたままであるときは、その心身に何らかの圧迫を受け、任意の供述は期待できないものと推定せられ、反証のない限り、その供述の任意性につき一応の疑いをさしはさむべきである。

→ ※本件は取調べが「終始おだやかな雰囲気」のうちに行われた等の反証が成立→任意性肯定・上告棄却（公選法違反の事案）。

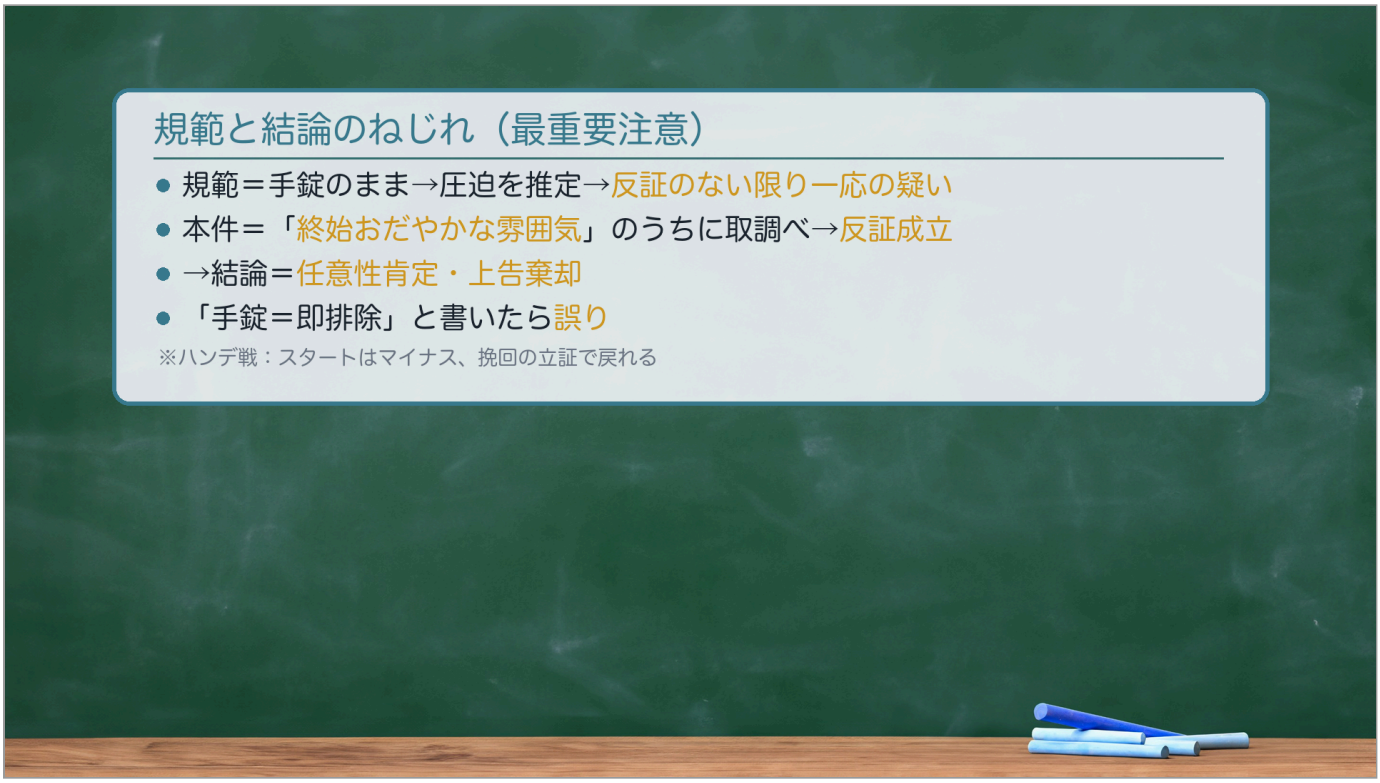


図：最二小判昭38・9・13――手錠のままの取調べは「原則 疑いあり」、反証で覆る

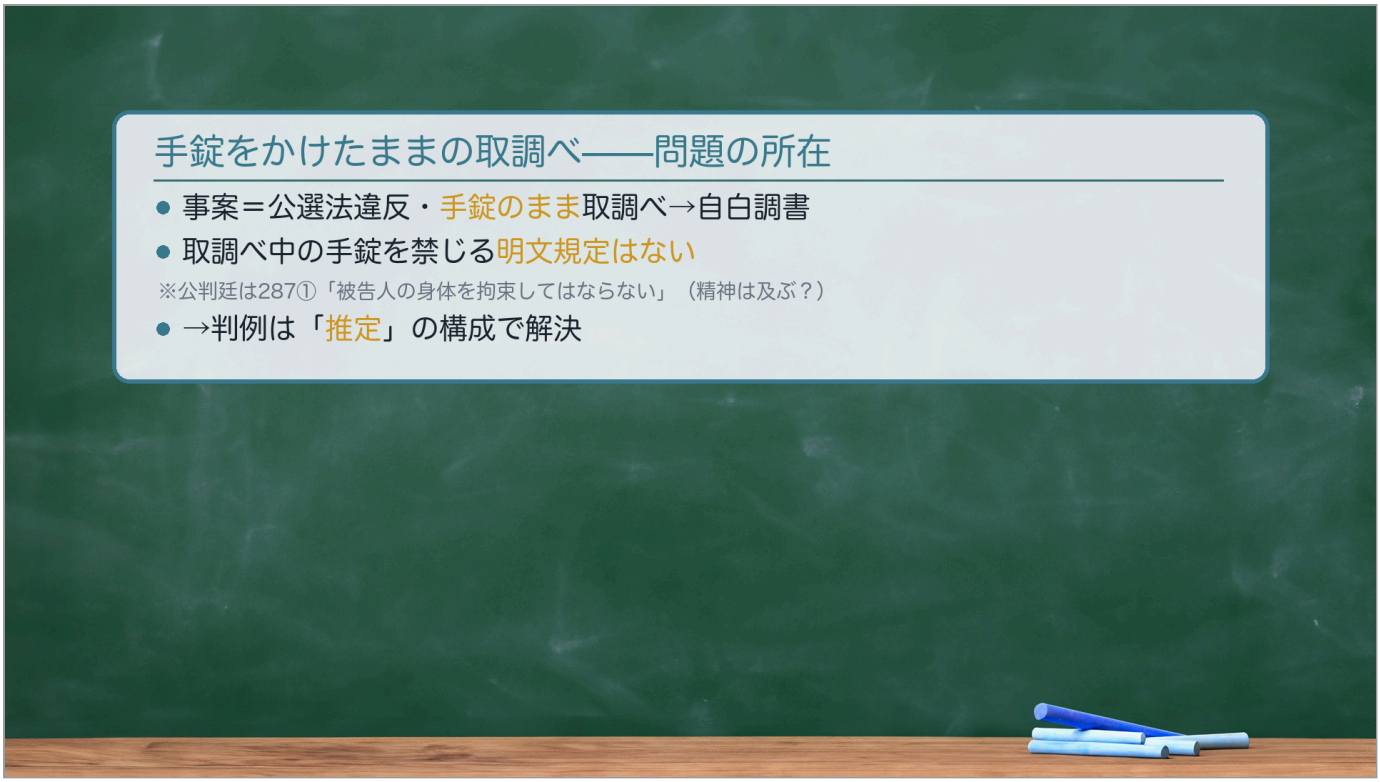
規範と結論のねじれ（最重要注意）

- 規範＝手錠のまま→圧迫を推定→反証のない限り一応の疑い
- 本件＝「終始おだやかな雰囲気」のうちに取調べ→反証成立
- →結論＝任意性肯定・上告棄却
- 「手錠＝即排除」と書いたら誤り

※ハンデ戦：スタートはマイナス、挽回の立証で戻れる



図：規範は「原則 任意性に疑い」、しかし当該事案の結論は「任意性肯定（上告棄却）」のねじれ



図：手錠のままはスタートがマイナス（疑いあり）——反証で覆せるハンデ戦の構造

最大の注意点：この事件自体の結論は**任意性肯定（上告棄却）**です。当該事案では取調べが終始おだやかな雰囲気で行われたという事情が認められ、反証が成立しました。規範は「原則 疑い」、結論は「肯定」というねじれを知らないと短答で落とします。

3説での対比： - 任意性説：身体の圧迫から心理を見る。 - 違法排除説：必要もない手錠での取調べ自体を違法と評価し排除に向かう。

9 類型④接見制限中の自白

論文の骨格

4つ目は**接見制限中の自白**（接見交通権回の宿題の回収）です。

被疑者にとって弁護人は外の世界とつながる唯一のパイプです。そのパイプを塞がれた密室の孤立状態で取られた自白の処理が問題です。

最高裁の確立した定式はここでは固まっていません。だからこそ3説の使い分けが活きます。

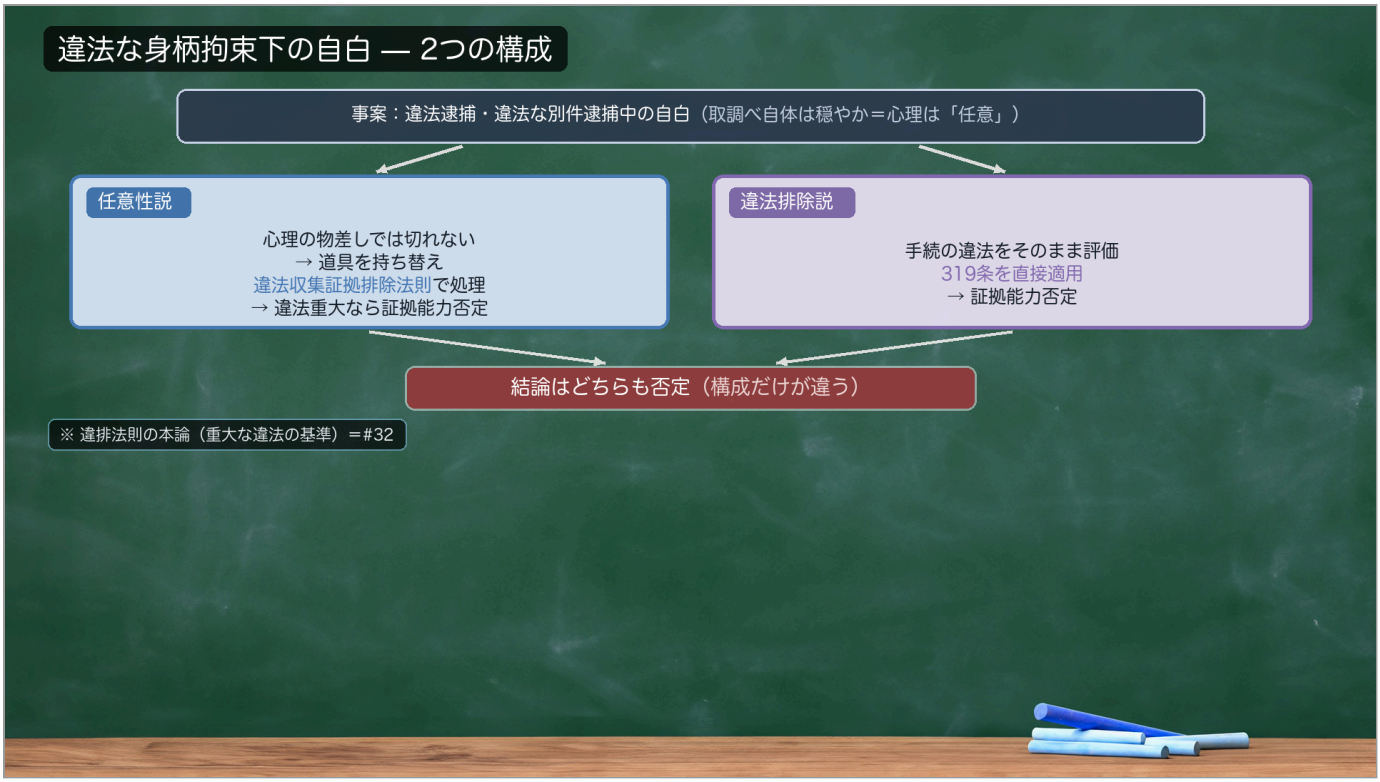
- **任意性説**：接見制限を任意性判断の**一事情**として他の事情と総合評価する。総合して疑いが残れば排除。
- **違法排除説**：捜査官の手元に向くカメラで直截に排除へ向かう。

論文では自分が立てた説で筋を通すことが重要です。

10 類型⑤違法な身柄拘束下の自白

論文の骨格

5つ目は、3説が最もきれいに分かれる類型です。



図：違法逮捕・別件逮捕下の穏やかな自白——任意性説と違法排除説で構成が分かれる

事案：令状のない違法な逮捕や本命を吐かせるための違法な別件逮捕で身柄を拘束している間の自白。ただし取調べ自体は終始穏やかで、被疑者も自ら進んで話している。

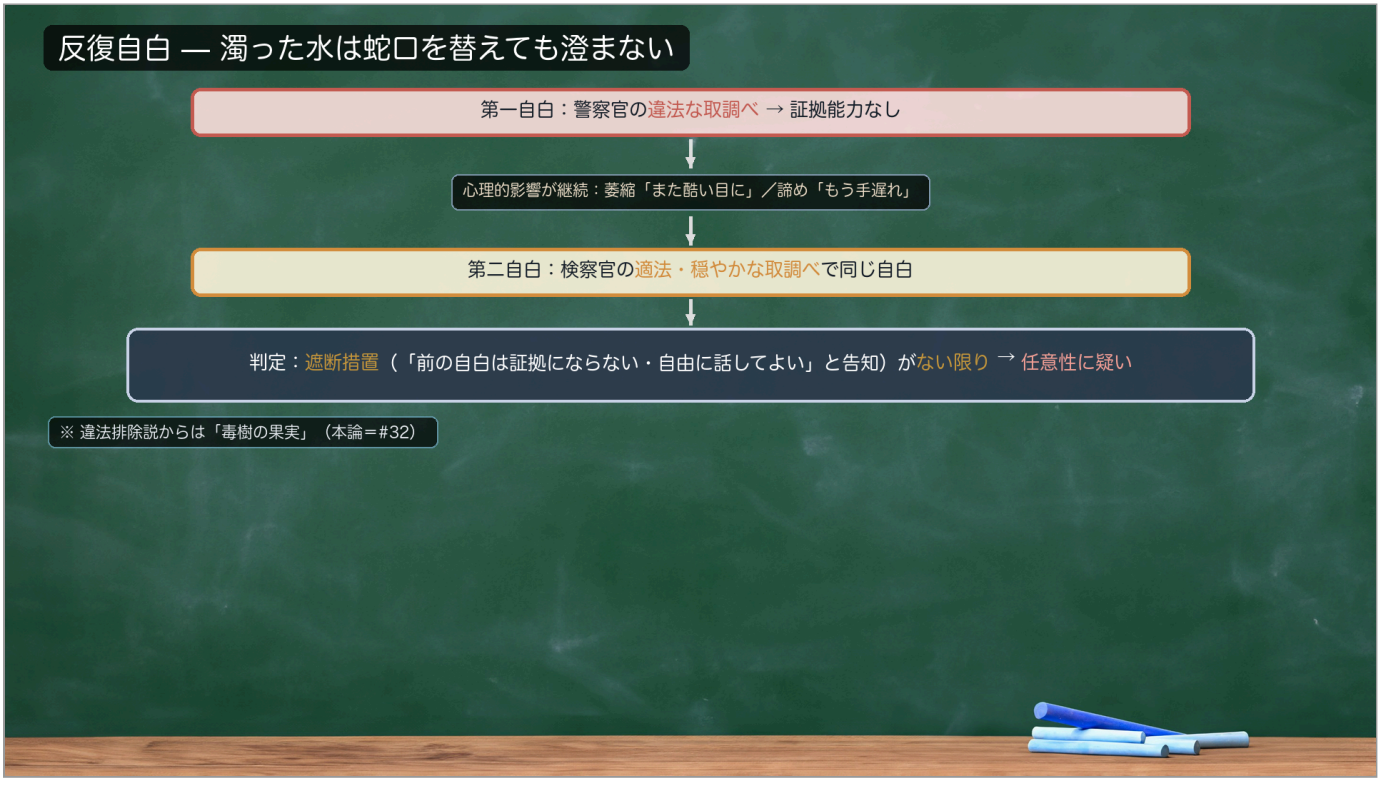
- **任意性説**：心が自由なら「任意性あり」となってしまう。この類型では**違法収集証拠排除法則**で処理します。拘束の違法が重大なら証拠能力を否定します（本論は#32で扱います）。
- **違法排除説**：ストレートに自白法則（319条）を直接適用。

結論はどちらも否定になりえますが、**構成**が分かれます。論文で構成を書き分ける最大の見せ場です。

11 類型⑥反復自白

論文の骨格

最後、6つ目は**反復自白**です。時間軸が入る応用型です。



図：第一自白（違法）→遮断措置の有無→第二自白の証拠能力の流れ

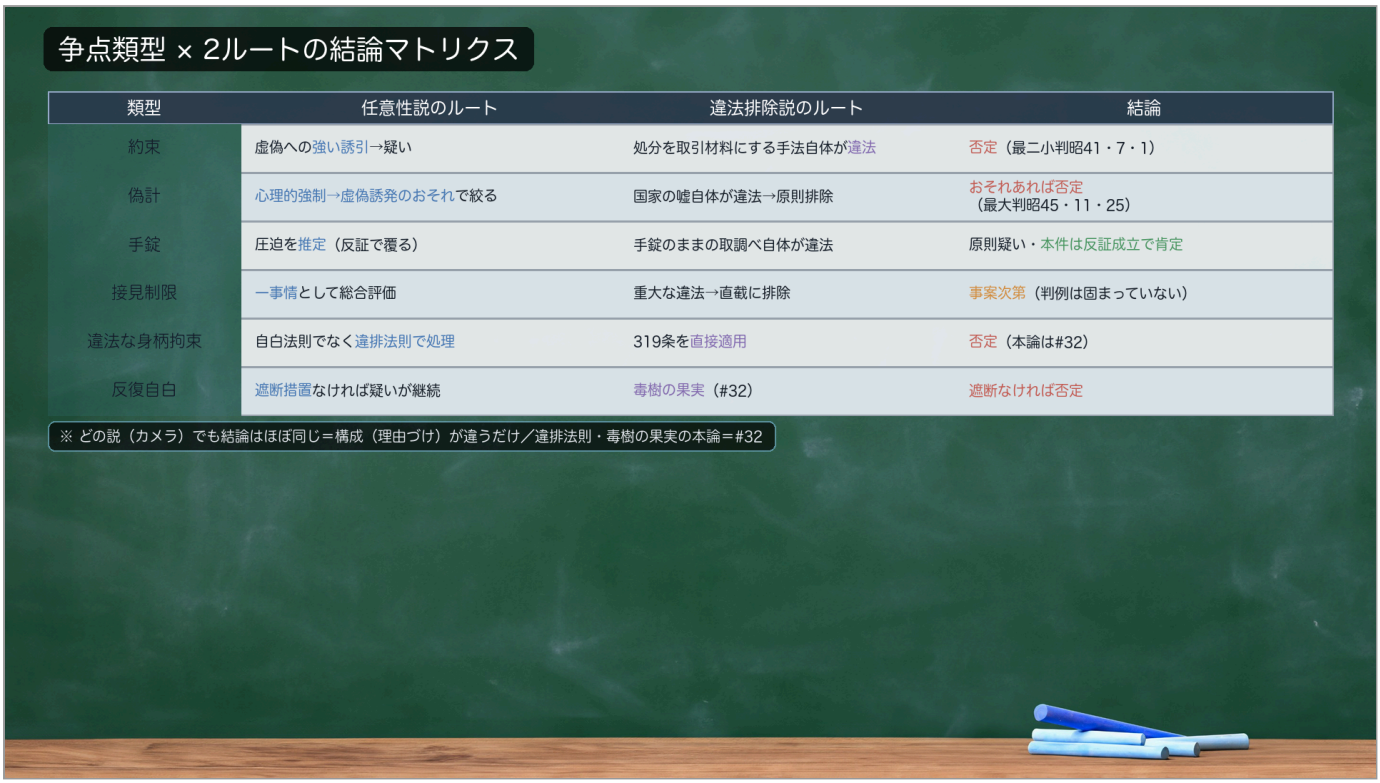
事案：①警察官が違法な取調べで第一自白を取った。②後日、検察官が適正な手続で取調べ、また同じ自白（第二自白）をした。この第二自白は使えるか。

被疑者の心の中には「また否定したらひどい目に遭う」という萎縮や「もう手遅れだ」という諦めが続いています。蛇口を替えただけでは濁った水は澄みません。

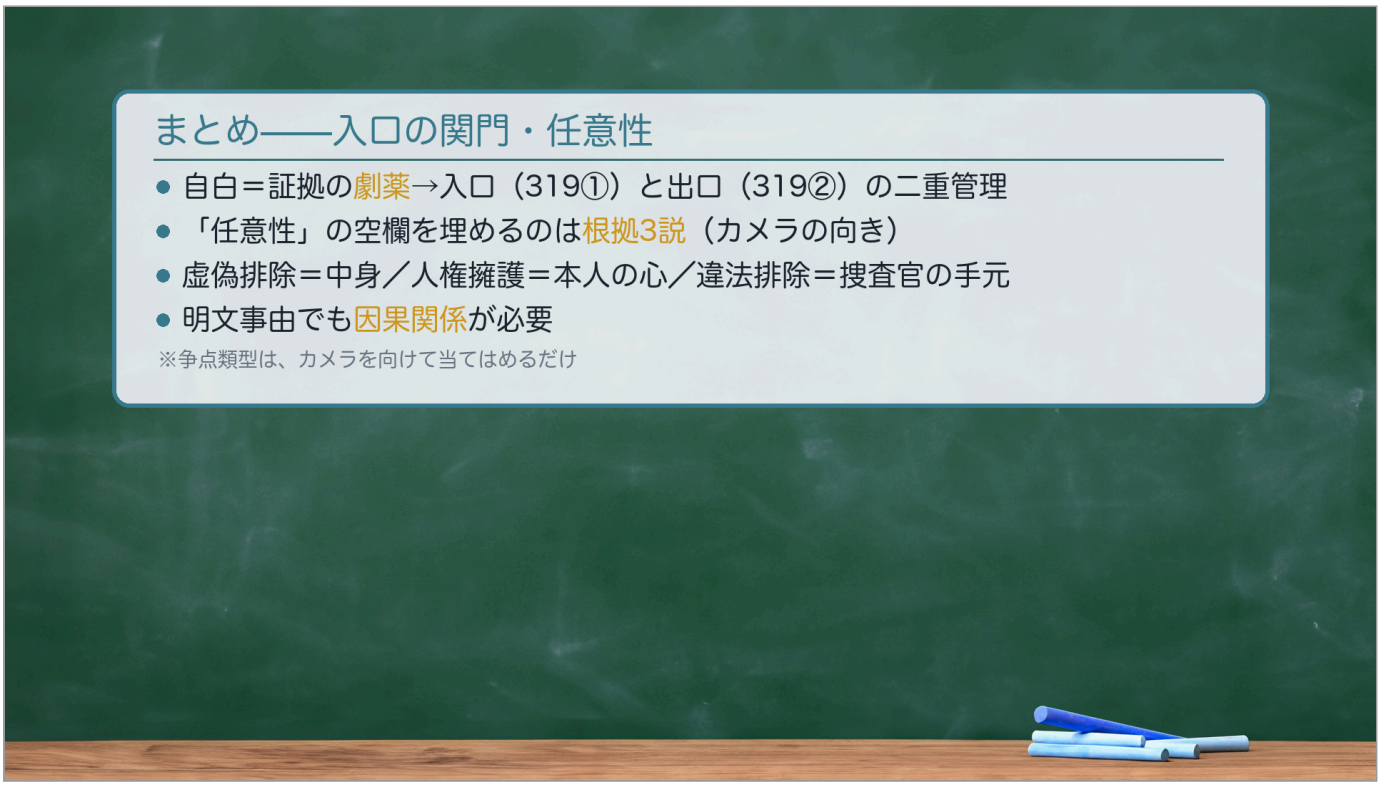
- **任意性説**：影響を断ち切る**遮断措置**（「前の自白は証拠にならない、ここでは本当に自由に話していい」と明示すること）がない限り、任意性に疑いが残る。
- **違法排除説**：**毒樹の果実**の考え方（毒のある樹から採れた果実も毒に染まる）を適用。本論は#32違法収集証拠排除法則で扱います。

12 まとめ——類型×3説マトリクス

短答・論文共通



図：6類型（縦）×任意性説・違法排除説（横）のあてはめマトリクス



図：各類型の到達点一覧（到達点まとめ板書）

各類型の到達点を一覧します。

類型	任意性説の結論	違法排除説の結論
①約束	疑いあり（誘引で虚偽誘発のおそれ）	権限外の取引＝手続違法
②偽計	心理的強制＋虚偽誘発のおそれがあれば疑いあり	捜査手法自体を違法視
③手錠	圧迫を推定・反証で覆る（当該事案は肯定）	手錠取調べ自体を違法
④接見制限	一事情として総合評価	重大な違法として直截排除
⑤違法身柄	自白法則では処理不可→違法収集証拠排除法則へ	319条を直接適用
⑥反復自白	遮断措置なければ疑いが続く	毒樹の果実（#32本論）

◆ 短答ひっかけ

- 憲法38条2項は一般条項を含まない（明文事由のみ）。319条1項が一般条項を上乗せしている。
- 明文事由があっても因果関係がなければ排除されない（一貫自白・釈放後相当期間経過の事例）。
- 手錠自白の最判昭38・9・13の**規範は「原則 疑いあり」だが、当該事案の結論は「任意性肯定（上告棄却）」**。規範と結論のねじれを混同しない。
- 偽計は直ちにアウトではない。心理的強制＋虚偽誘発のおそれという要件を満たした場合に排除される。
- 入口（証拠能力）のルールは自白＋承認（322条1項但書）に及ぶ。出口（補強・319条2項）は自白のみ。
- 違法な身柄拘束下の穏やかな自白：任意性説では319条ではなく**違法収集証拠排除法則**で処理する。

◆ 論文の型

偽計による自白（最大判昭45・11・25）

自白法則（319条1項）に関連する最重要論文論点です。

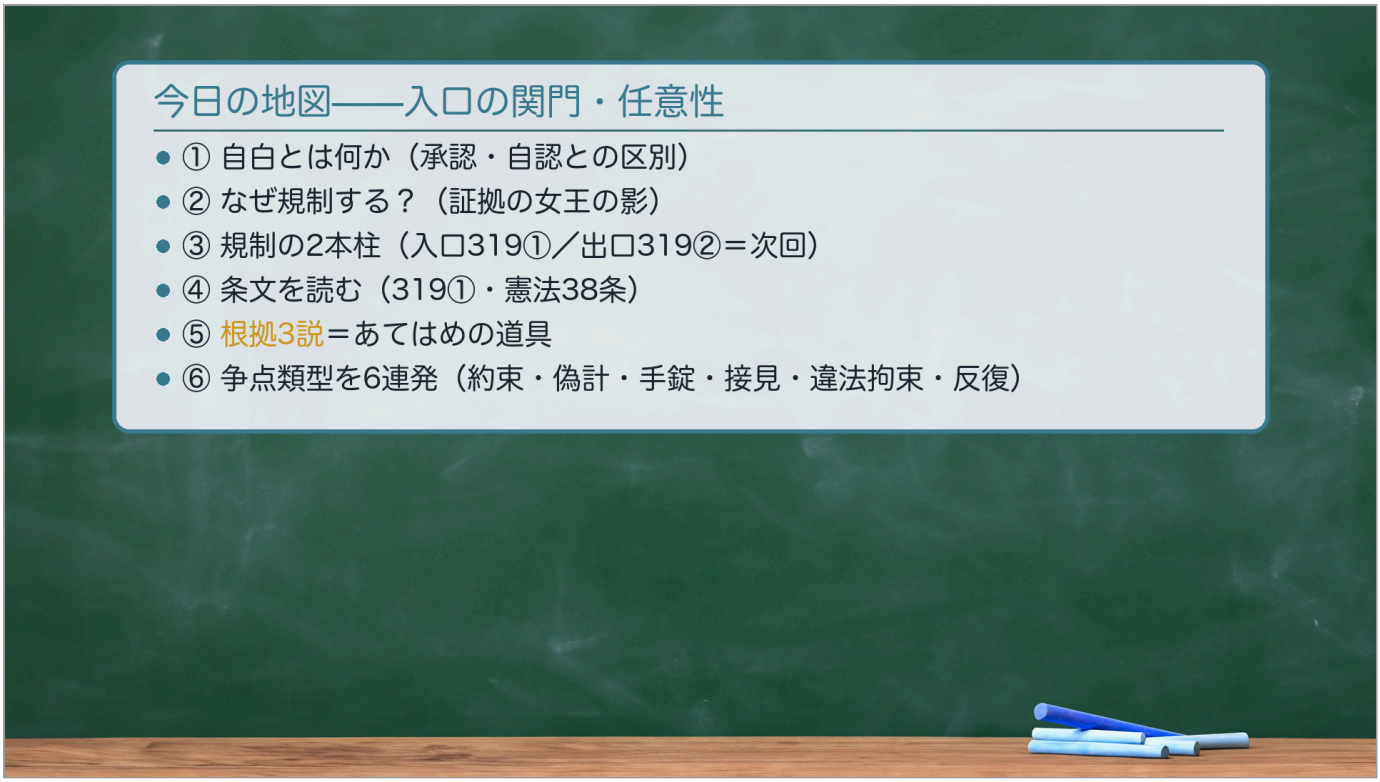
規範 偽計によって被疑者が心理的強制を受け、その結果虚偽の自白が誘発されるおそれのある場合には、任意性に疑いがあるものとして証拠能力を否定すべきである（大判昭45・11・25参照）。採用すれば319条1項に違反し、ひいては憲法38条2項にも違反する。

答案の型 1. 問題提起：「偽計で得た自白に証拠能力はあるか。319条1項の任意性との関係で問題となる。」 2. 規範：上記の定式。 3. あてはめ：偽計の内容が「心理的強制を生む程度か」「虚偽誘発のおそれがあるか」を具体的事情から検討する。 4. 結論：要件を満たせば「任意性に疑いがあり証拠能力を否定する」。

根拠3説を立てる場合の型 1. 自白法則の根拠を示す（虚偽排除説・人権擁護説・任意性説・違法排除説から自分の立場を明示）。 2. 立てた説の「カメラの向き」で当該類型を判断する。 3. 違法身柄拘束型では任意性説から違法収集証拠排除法則へのルート変更を示す。

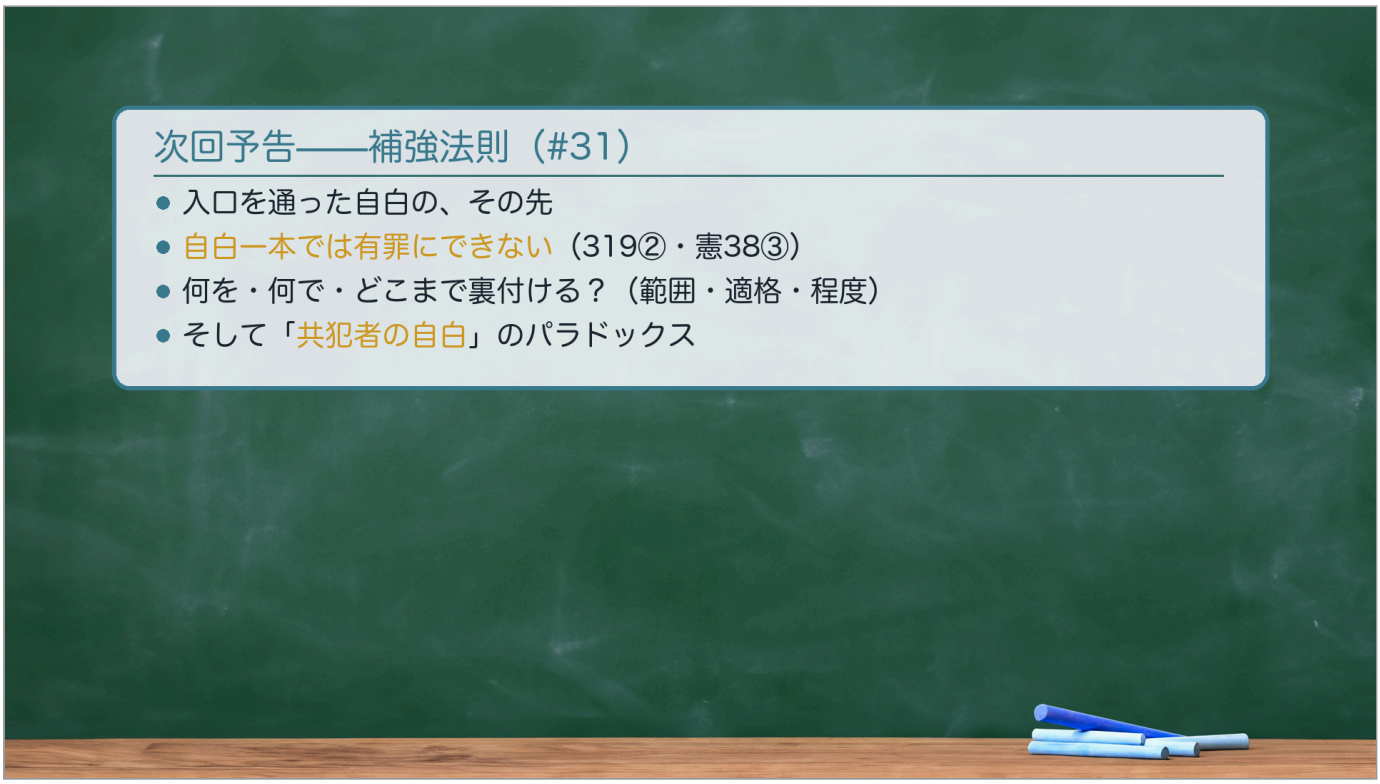
◆ 今日の地図（保存版）

- **自白**は犯罪事実の全部・重要部分を認める供述。**不利益事実の承認** っ 自白 っ 有罪の自認（319条3項）。
- 322条1項但書で承認にも自白法則が準用される（伝聞との交差点）。
- 法は二重の安全装置を設けた——**入口（319条1項・証拠能力）** と **出口（319条2項・補強法則）**。
- 根拠3説は暗記で終わりでなく、6類型のあてはめを導く道具。カメラの向き（情況・心・手続）で物差しが変わる。
- 明文事由があっても**因果関係**が必要。イコール即アウトではない。
- 6類型の到達点：①約束＝疑いあり ②偽計＝心理的強制＋虚偽誘発のおそれがあれば疑いあり ③手錠＝推定・反証可（当該事案は肯定） ④接見制限＝一事情として総合 ⑤違法身柄＝任意性説→違排法則 ⑥反復自白＝遮断措置なしなら疑いが続く。
- 最大の論文の見せ場：類型⑤（違法身柄拘束）で任意性説と違法排除説の**構成の書き分け**。



図：自白法則の全体地図（自白の意義→2本柱→3説→6類型）

次回は#31「補強法則（憲法38条3項・319条2項）・共犯者の自白」。証拠能力が認められた自白でも、自白一本では有罪にできない出口の規制です。補強の範囲・適格・程度と、共犯者の自白という難問（自白したYは補強なしで無罪、否認したXが有罪になるパラドックス）を扱います。



図：次回#31 補強法則の予告（319条2項・憲法38条3項・共犯者の自白）